

篆隸萬象名義解説

高田時雄

光緒六年庚辰の歳（1880）楊守敬は清朝の駐日本大臣であった何如璋の招きに應じ隨員として東京に渡った。當時、日本の古書店の店頭には希覯の古書がなお豊富にあり、しかもその中にはすでに漢土では逸失してしまったものが数多いことに一驚を喫し、それらを悉く購得すべく決意した。幸いに攜え來たった漢魏六朝の碑拓や古錢、古印などが日本人の好むところであったために、それらを以て資と爲し、大量の古書を入手し得た。數年の後、何如璋の後任、黎庶昌の名に於いて出刊された『古逸叢書』はかくして得られた書物から尤品を選んで精巧に複製したものであった。楊守敬の蒐書の指南となったのは『經籍訪古志』であったが、編者の一人である森立之も當時まだ存命で、楊はしばしばその意見を叩き¹、また岡千仞を初めとする多くの學者文人との交遊により、書物の購求には大いに便宜が得たらしい²。

楊守敬の訪書の成果は四部の各方面にわたるが、小學書では顧野王原撰の玉篇零卷の發見が最たるものである。玉篇と密接な關連を有する「篆隸萬象名義」もまた同時期に楊守敬の手に歸し、漢土にその存在を知られることとなった。顧野王が梁の大同九年（543）に著した「玉篇」は、早くに梁の太宗の命により蕭愷らが刪改を加え³、唐の高宗の上元元年には南國の處士、富春の孫強が字を増したと伝える⁴。さらに宋初の大中祥符六年（1013）には、陳彭年等の重修を経て、今日見る「大廣益會本」の姿となった。顧野王の原本玉篇三十卷は、經籍を引くこと極めて詳細であり、したがって卷帙もまた龐大なものであったが、「大廣益會本」ではその詳細な訓注は必要最小限にまで切りつめられ、同じく三十卷とは稱するものの、實際には上中下のわずか三冊にすぎない。楊守敬がこの玉篇零卷の發見に狂喜したことは想像に難くない。しかし残念なことに、原本玉篇はわずか全體の八分の一を存するに過ぎない殘缺本である。しかるに「篆隸萬象名義」は原本玉篇から字音と訓注とを抄出したものであり、經籍の引文こそ省略されているが、首尾完好の本であるため、原本玉篇の姿を窺い知る恰好の材料である。楊守敬は『古逸叢書』に収めた「玉篇零卷」の跋（光緒十年すなわち1884年の正月）に「今、顧氏の原本はその全きを見るを得ざると雖も、日本の釋空海撰する所の萬象名義、その分部隸字は、此の殘本（玉篇）を以てこれを校ぶるに、一一吻合すれば、則ちその全書は皆顧氏の原本に據りて、絶えて増損凌亂なし」と言い、その尊重すべきを明らかにした。以來「萬象名義」の價値が世に喧傳されることとなった。

楊守敬は善本を獲得するごとにその原委を記した題識を認めるのが慣わしであったが、その『日本訪書志』は後年それらの題識を整理して成ったものである⁵。上記の原本玉篇の跋もまた収めて

¹ 『日本訪書志』には森との會見の様子を記す部分がある。また楊守敬は、後述するように、森立之からその所蔵の「萬象名義」寫本を譲り受けている。

² 楊守敬の日本での活動は自身の述べるところによる。『日本訪書志』序および「鄰蘇老人年譜」（『楊守敬集』第一冊所收、1988年、湖北人民出版社）を参照。

³ 「梁書」蕭子顯傳。

⁴ 「大廣益會玉篇」卷首、また王應麟「玉海」卷四十五。孫強が富春の人であることをいうのは前者。

⁵ 光緒二十七年（1901）宜都楊氏鄰蘇園刊。封面の裏の刊記には丁酉年（光緒二十三年）となっているが、「鄰蘇老人年譜」の自記により改める。卷首の序文もまた辛丑（1901）年のものである。

その第三巻にある(「玉篇殘本四卷刻入古逸叢書」)。同じ『日本訪書志』第三巻には「篆隸萬象名義三十卷舊鈔本」を載せる。これは「萬象名義」に關して書かれた記念すべき最初の文獻と稱してよい。後の問題點の一二がすでに指摘されていることもあり、上記「玉篇」跋と重なる部分もあるが、以下に少し長くこれを引用したいと思う。

「(首略四十八字)此の書は蓋し顧野王の玉篇に據りて本と爲し、一篆一隸を以てこれに配す隸は即ち今の眞書なり。その注文は則ち大廣益本玉篇の如くにして但だ訓詁を擧げ、引く所の經典を載せず。唯だ載せる所の篆書は、每部中或いは有り或いは無く、當にこれ鈔胥のこれを省けるなるべし。又巻首より面部に至る、分析して十二巻と爲せるに總目は則ち顧氏原巻に仍る、此れ不可解なり。今、古鈔の原卷子本は尚お高山寺に在り。余嘗て紙幣局に於いてこれを見る。原巻は古しと雖も、亦た空海の親筆に非ず。此れは又狩谷掖齋の所藏にして、その籤題は尚これ掖齋の親筆なり。跋に據れば則ち源弘賢の不忍文庫中の物なり。按ずるに野王の玉篇は、一たび孫強に亂され、再び陳彭年に亂されて、その原本は遂に尋ぬるべからず。今、古鈔の卷子本五巻を得て古逸叢書中に刻入すれば、以て顧氏の眞面目を窺い見るを得べし。然るに亦た只だ十の一二を存するのみ。今、此の書を以て五殘巻と校ぶれば、則ち每部隸する所の字、一一相合し、絶えて増損凌亂の弊なし。且つ全部一の殘闕もなければ、余以爲らく、その寶とすべき當に玉篇五殘巻の上に出ず。(中略)若し此の書に據りて校刻して世に餉らば、唯に廣益玉篇の上に出るに非ずして、直ちに一部の顧氏原本玉篇に當つるも可なり。唯だ此の書を鈔せし者、草率の極みにして、奪誤滿紙なれば、此は則ち小學に深き者の理董を待つ有らざる能わず。(下略)」

さて臺北の故宮博物院には楊守敬舊藏の「篆隸萬象名義」寫本が都合三本所藏されている。その一本は八冊に分裝し、巻首に『日本訪書志』に收めたものと同文の題識を附綴する。そこには「光緒癸未(1883)秋八月宜都楊守敬記于東京使館」とあって、この題識の書かれた時期が分かる。また一本は六冊からなり、「森氏開萬ノ冊府之記」の印記がある。したがって森立之から得たものである。二本とも巻末に屋代弘賢の跋文を載せる。第三の本は巻十五から十八金部の「鑿」字に至るまでを存する零本である。故宮以外に、やはり臺北の中央圖書館にも別の楊守敬舊藏の一本が所藏されている。これは故宮の第一本からの影寫本といい、巻首に上掲の題識が添えられているが、字句にかなりの異同がある⁶。今、『日本訪書志』及び故宮第一寫本に見える題識を甲本、中央圖書館藏本に見えるそれを乙本とすると、乙本は未定稿で、甲本の草稿であったと判断される。というのは乙本で玉篇殘本の數を四巻としているのに對し、甲本ではそれを五巻と改めているからである。原本玉篇を古逸叢書に刻入するに際し、次ぎのような経過を辿ったことが知られている。先ず光緒八年(1882)に、巻九(中缺)、巻十八之後分、巻十九、巻二十七之後半を出刊した⁷。後に續收本と合わせたものと區別して、これを單行本と稱した。次いで、翌明治十六年(1883)十一月印刷局長得能良介が高山寺所藏の巻二十七前半部を影印出版した結果、その寫眞の提供を受けてこれを石山寺所藏の後半部に併せた。さらに鶴飼徹定の斡旋によって、福井崇蘭館所藏の巻第九中間缺落部、久邇宮家所藏の神宮文庫本巻二十二の模本とを得、續收原本玉篇として刊行した。これが續收部分である⁸。續收巻第二十二の後に附した黎庶昌の書後は光緒十年(1884)六月の日付であるか

⁶臺北の寫本についての情報は、下に擧げる楊守敬題識の異同もふくめ、すべて阿部隆一『増訂中國訪書志』(昭和五十八年、東京・汲古書院)による。その頁160-161, 176を参照せよ。

⁷巻九(中缺)は早稻田大學本、巻十八之後分、巻十九は藤田家の藏、巻二十七之後半は石山寺の藏本。

⁸『古逸叢書』の第十一種として刊行された「影舊鈔卷子原本玉篇零巻」は、續收との關係もあり、本によって若干錯綜した點が見られる。通行本(今、京都大學人文科學研究所の本による)では、第一冊に巻九、巻十八之後分を収め、第二冊に巻九の缺文、巻二十二、巻十九、巻二十七(前・後分)の順に収める。巻二十二の後は黎庶昌の光緒十年の識語を置き、巻二十七前分の後には得能良介の識語がある。さらに巻末に『經籍訪古志』の抜粹、黎庶昌の光緒八年の跋文、楊守敬

ら、楊守敬題識の乙本はそれ以前に書かれたものである。その甲乙を比較して注意されるのは、乙本で「此は蓋し彼より傳鈔せるなり」と簡単に片付けているものを、甲本では「此れは又狩谷掖齋の所蔵にして、その籤題は尚これ掖齋の親筆なり。跋に據れば則ち源弘賢の不忍文庫中の物なり」と改めている点である。楊守敬の口吻よりすれば、自身の得た本が、屋代弘賢の不忍文庫から掖齋に伝えられた本そのものであるように思われるが、実際にはどうであろうか。或いはそれは乙本題識執筆後に新たに入手したものであるのだろうか。少なくとも、阿部隆一氏によれば、楊守敬の本に見える屋代弘賢の跋は弘賢の自筆ではないという。考えられることは、楊守敬が所獲の本を、屋代弘賢の跋の存在によって楊守敬が不忍文庫舊蔵と誤認したか、或いは実際に不忍文庫本を得たのだが何らかの理由で現在臺北にある觀海堂本中には伝えられていないか、の何れかであるが、當面、これを判断する手がかりがない。今後の課題である。

いずれにせよ、幕末以來世上に流布した「萬象名義」寫本の多くは、高山寺の原本から出たものではなく、屋代弘賢所蔵寫本から出たものと想像される。楊守敬が近代における「萬象名義」再発見の功勞者であったことは間違いないが、その再発見も不忍文庫の本とその轉寫本の流通がなければ有り得なかったに違いない。その意味では屋代弘賢の博搜の功績は大きい。弘賢の跋は楊守敬が『日本訪書志』に移録しているが、再びここに掲出しておきたいと思う。

「弘賢嘗て弘法大師作書目錄を讀むに、篆隸萬象名義三十卷あれど、その存亡を知らず。余固より小學に勤めれば、これを求むること茲に年有り。享和元年（1801）冬、稻山・秋月二公、寫本を以て寄せられ云う、原本は山城國の高山寺に藏せらると。その部首は一に始まり亥に終わること、一に説文玉篇に依る。音訓に至りては二書と互いに入出あり。當時何の書に據りしかを知らず。數十年その名を聞けども見るを得ざりしもの、一旦これを獲、吾が不忍文庫の榮、これに加うるはなし。什襲して以て藏さん。源弘賢踴躍歡喜して識す。」

楊守敬はこれに「按ずるに弘賢の玉篇と出入ありと謂うは、蓋し見る所の廣益本に據りて言えるならん」と注釋する。弘賢が「萬象名義」寫本を獲た享和元年（1801）にはなお「原本玉篇」の存在は知られていなかったのである。ともあれ此の年を初めとして「萬象名義」は次第に學者間に轉々鈔寫され、傳本を増やしていくこととなった。楊守敬の所獲本が眞實狩谷掖齋の舊蔵本であったか否かはともかく、屋代弘賢とは極めて密接な交際があった掖齋が「萬象名義」を所持していたことは容易に想像されるのみならず、またそれを示す證據もある。すなわち京都大學附屬圖書館現蔵

の光緒十年正月の跋文を出す。第一冊巻首の目錄「原本玉篇見存目錄」は卷九言部に始まり、卷十八之後分、卷十九、卷二十七であり、第二冊のほうは「續收原本玉篇目錄」として、先ず冊から欠まで五部を出した上で「以上即本書第九卷前刻册字至 字中間之闕文」と注し、さらに山部に始まる卷二十二を擧げている。これでは目錄と内容の齟齬は明白である。必ずや別に目錄に見合ったかたちになった本があった筈である。1985年に北京の中華書局から影印出版された「原本玉篇殘卷」を見ると、そこに用いられた本では、第一冊が「原本玉篇見存目錄」の後、卷九、卷十八之後分、卷十九、卷二十七の後分の順に出し、次いで『經籍訪古志』の抜粹、黎庶昌の光緒八年の跋文を附す。楊守敬の跋は見えない。第二冊は、先ず（これが正しいかどうかはいま問わず）黎庶昌の光緒十年の識語を掲げ、次いで「續收原本玉篇目錄」、卷九中關部分、卷二十二で終わっている。これは正しく目錄どおりの配列であって、本來の形であったと想像される。注意すべきは、中華書局本の底本の目錄中、糸部（卷二十七）下の注記「首缺今存一百十九字」を通行本の目錄では「糸部第四百二十五凡三百九十二字」としている点である。これは明らかに、高山寺所蔵の卷二十七前分を入手して以降、版に入木訂正したものである。通行本では、卷二十七の高山寺・石山寺二本を綴合することを優先するために、目錄との不整合や巻次の不連続が起こっているわけである。中華書局本の封面には「單行本」の印が押されてあるように見える。單行本というのは續收本が出て以降の調整を経て、既に出来上がっていた最初の四巻を収めた本を稱したものであるらしい。岡井慎吾『玉篇の研究』によれば、黎庶昌の「籤目」というものがあつたらしい。これは通行本、中華書局底本ともに載せないのだが、そこに次ぎのように述べられているという。「單行本已に出でしに、日本の印刷局長得能良介始めて高山寺より糸部の巻首より續に至る半巻を搜獲して模刻し、印本を以ておくれたれば因りて別刊補完せし故に一巻の中に兩次第あるなり。」「單行本」の由來はこれによって氷解する。ただ岡井氏の用いた本は、いわゆる單行本と、卷九中關部分、卷二十二、卷二十七前分を合わせた二冊からなっていたらしい。それでこそ岡井氏が上文の別刊の後に括弧で（古逸叢書の後の一冊をいふ）と説明したのの合點がいく。それに対して中華書局底本は卷二十七の前分を欠いているところを見ると、卷二十七前分高山寺本のみを、それこそ別刊補完したものがあつたのかも知れない。

の「萬象名義」寫本は、もと京の醫師百々絢の舊藏であるが⁹、その卷末には天保二年（1831）武州江戸の狩谷望之の本より寫したと明記してある¹⁰。弘賢の跋を備えることは勿論である。同じ天保二年寫本として富岡鐵齋舊藏本があり、また群馬縣立文書館には屋代弘賢の轉寫本があるということである¹¹。そのほか『國書總目録』（増訂本）には、宮内廳書陵部の殘缺本四冊、高野山三寶院の文政十三年寫本、尊經閣本（寫年、冊數不明）を著録している¹²。京大附屬圖書館にはまた、「伴信友校藏書」第六冊として、第一卷の田部までを寫した抄出本が存在する。これは弘化三年丙午（1846）、信友七十六歳の時に書寫させた本である¹³。上述のように楊守敬の寫本が三本（あるいは四本）あり、この他にも幕末明治にかけての寫本はかなり存在すると思われる。

二

弘法大師空海の撰述とされる「篆隸萬象名義」は漢字字書ではあるが、わが國で作られた字書として最古のものである。すでに觸れたように京都柵尾の高山寺に一本が傳承されてきた¹⁴。信友以降に高山寺本から作られた轉寫本を除いては、今日まで他の古寫本の存在は全く知られず、高山寺本が正真正銘の海内の孤本である。

したがってここに影印される本もまた當然の如く高山寺本であるが、これは卷末に「永久二年（1114）六月以敦文王之本書寫之了」とあるとおり、今をさかのぼる880年ばかり前の寫本である。縦26.8糎、横14.6糎の粘葉装で、每半葉六行、各行を上下に分かち各一字ずつを配する。したがって普通には每半葉十二字を掲載する。全六帖に編成し、各帖の紙數は本文だけを数えればそれぞれ、百葉、九十二葉、八十九葉、八十四葉、百五十一葉、百八十八葉となり、都合七百四葉、それに一万五千六百五十七字を収録する¹⁵。一見して第五、六帖の葉數が他に比べて多いことに氣付く。この第五、六葉はまさに後述の續撰部分に屬し、成立の上でも前四帖とは異なっているが、それは後で觸れることにしよう。何れにせよ第五、六帖の葉數が多いために、これを各二分して全八帖とする寫本もあった¹⁶。

本書は卷首に「東大寺沙門大僧都空 撰」と明示され、空海の作であると認められる。宗内で作られた著作目録、例えば濟暹（1025-1115）の「弘法大師御作書目録」に「篆隸字書三十卷」、正覺房すなわち覺鑊（1095-1143）の「大遍照金剛御作書目録」に「篆隸萬象名義三十卷」、同じく覺鑊の「高祖御製作書目録」「御作目録」に「篆隸六卷」、政祝（1366-1439以後）の「大師御作目録」に「篆隸字書卅卷異本六」とある¹⁷。また高山寺寫本とほぼ同時期の「圖書寮本類聚名義抄」にも

⁹ 明治三十七年八月一日百々復太郎氏寄贈。

¹⁰ 「天保二年月、以武州江戸狩谷望之之本全書寫卒、淵業諸師製作目録中弘法大師目録云、篆隸字書三卷、或六卷、或卅卷云々蓋此書、然則三卷或六卷者誤傳。」

¹¹ 『弘法大師空海全集』第七卷（昭和五十九年、筑摩書房刊）所載の築島裕「高山寺藏本篆隸萬象名義」解説による。「屋代弘賢轉寫本」とは恐らく、弘賢の跋があることからいうものと思われる。

¹² 『國書總目録』（増訂本）に京大の天保二年寫本を五卷一冊とするのは誤りで、正しくは高山寺本と同じ六冊からなる。ただし每半葉八行である點は高山寺本と異なる。あるいは椀齋の本がすでに八行だったものか。『國書總目録』によれば、書陵部にはまた「篆隸萬象名義畫引」という索引があるというのが、作者が誰であるかは言わない。

¹³ 卷末に朱書して云う「以下至三十卷全部存、不堪書寫、於于此止筆、本書凡八百餘帙、合釘爲八冊、執筆猶子山岸惟基。」また「弘化三丙午年七月於京伴信友識、七十六歳」とあり。底本は八冊に合釘してあったというのが注意される。

¹⁴ 一貫して高山寺にあったことは、寺藏經籍の古い目録である「法鼓臺聖教目録」にも「篆隸字書一部卅卷六帖調之」（『弘法大師全集』第十五卷、明治四十三年、祖風宣揚會編、吉川弘文館・六大新報社刊、また『昭和法實總目録』第三卷）とあることで推測される。さらに白藤禮幸氏によれば、「建長二年（1250）高山寺聖教目録」にも「篆隸萬象名義六卷」と見えるという。同氏「篆隸萬象名義解説」『高山寺古辭書資料第一』（『高山寺資料叢書』第六冊、1977年、東京、東京大學出版會）頁643。

¹⁵ 収録字數は吉田金彦「圖書寮本類聚名義抄出典攷（中）」（『訓點語と訓點資料』第三輯、昭和二十九年）による。

¹⁶ 注13。

¹⁷ 以上の目録はすべて『弘法大師全集』第十五卷所收。後世の目録、例えば「釋教諸師製作目録」（その撰述時期は1548が上限、1667が下限という）では「篆隸字書或六卷、或三十卷云々三卷」といい、またそれより幾分古いと想像される「諸

本書を「弘云」として引いていることから、古くから空海の作と認められていたものであろう。空海は延暦二十三年（804）に入唐、同年の十月に長安着。その後青龍寺の惠果和尚を師として学び、大同元年（806）の十月に歸國している。その後、弘仁元年（810）に東大寺の別當となり、大僧都に任ぜられたのは天長四年（827）のことであるという¹⁸。だとすれば空海は承和二年（835）に六十二歳で示寂しているから、その間、晩年の七八年の内の作である。

さて上に「萬象名義」は暹、鏤兩師の目録、さらに政祝の目録に見えることを言ったが、そこに三十巻といい、また六巻ともいうのは、巻立てと分冊とが混同されているもので、これら目録が著録する本は既に高山寺本の形になっていたと考えられる。ただし、ここに問題なのは、楊守敬が早くに指摘したように、總目と巻内で分巻が一致しないことである。楊守敬は「巻首より面部に至る、分析して十二巻と爲せるに總目は則ち顧氏原巻に仍る、此れ不可解なり」というが、これは第一帖についてのみの言及であって、実際にはさらに第四帖の最後までを五十巻に分けている。そして第四帖末尾には「篆隸萬象名義卷十五之上」と唐突に記されている。續く第五帖は禾から までの部首を目次として出し、次いで「篆隸萬象名義卷十五之下續撰惹曩三佛陀」、行を改めてもう一度「禾部」と題した上で、第四帖に収め残した禾部字を列挙し、卷廿一の氐部までを収める¹⁹。第六帖は卷廿二の山部から始まり卷三十の亥部で終わっている。つまり第一帖から第四帖までは「玉篇」の全三十巻の編成を更に細かく分け、恐らくは全書で百巻になるように構想されたものであるが、第五、六帖では「玉篇」どおりの三十巻編成になっている譯である。そこで、第四帖までは空海の原撰であるが、それ以降は後人の補って續撰したものであると一般に考えられている。「萬象名義」が空海晩年の作であることはすでに觸れたが、禾部の途中までで遂に完成を見るに及ばずして残されたものを、弟子筋に当たる人物が遺志を嗣いで完成に至らしめたものと思われる。しかし、その續撰者がどういう譯か空海の構想を無視して三十巻立てに戻したのは、矢張り解せない点である。或いは高山寺本の成立に関わる特殊な事情のせいであるかも知れないが、當面解明の糸口はない。

さてその續撰者が如何なる人物であるかについては、唯一の手がかりは第五帖に見える「續撰惹曩三佛陀」の文字であろう。岡井慎吾氏は「惹曩三佛陀が人名で有り得れば極めて妙だが、私には之を人名とする勇氣が無い」とされたが²⁰、惹曩三佛陀がいずれ梵語の jñāna-sambuddha（乃至はその俗語形の）音寫であることは間違いない。築島裕氏は、結論を保留しながらも「智覺」という僧名を想定しているが²¹、うまい具合にこれに当たる僧を検出し得ないのも事實である。ただ惹曩三佛陀という音譯の形式、すなわち音寫語の用字が正しく不空の學派のそれであり、眞言宗の傳統内で使用されるものであることは注意してよいと思われる。不空は ja に當てるのに以前の「闇」乃至「社」を「惹」に替え、na に當てるのに「那」を「曩」に替えたことが知られている。これは當時の長安音における鼻音聲母の脱鼻音化を反映するものであることは言うまでもない²²。この不

師製作目録」でも「篆隸字書三卷或六卷或卅卷云々」（以上二目録はともに『大日本佛教全書』所收）といって三巻とするのは根據が不明である。また謙順（1740-1812）の「諸宗章疏録」（『大日本佛教全書』所收）に「篆隸字書三十巻」とあるが、高演の「弘法大師正傳」（1844 纂）に附録する「御書目録」（『弘法大師全集』第十五巻所收）には「篆隸字書三十巻或云六巻、或云篆隸萬象名義」とあり、暹、鏤の目録を踏襲することが明かである。

¹⁸ 岡井慎吾氏は「東大寺別當次第」によって、空海の大僧都補任を天長七年（830）に懸けたが、後、白藤禮幸氏により「東寺長者補任」「弘法大師行化記」を根據として天長四年（837）に訂正された。今、この説を採用する。

¹⁹ これも第五帖はじめの目次では卷廿四末の 部までを収めるはずであるが、目次とは一致していない。

²⁰ 岡井慎吾「篆隸萬象名義を見て」（『藝文』第拾九年第貳號、昭和三年）頁九四。この論文を用いる場合には次號の「補正」を併せ見る必要がある。さてこの論文は後『柿堂存稿』（昭和十年、熊本、私家版）の頁 150-157 に「篆隸萬象名義を見て」と題して再録されたが、かなりの異同がある。『柿堂存稿』では引用箇所は「惹曩三佛陀が人名で有り得れば極めて妙だが私には其が分らぬ。曩と那とは音も近いが「南無を曩誤とも書く」惹那ならば惹那跋陀羅「唯識十代論師の一」惹那跋陀羅「涅槃後分經の譯者」などの例があり、惹那是智能、三佛陀は正覺者の義だと云ふ。大師の業を紹ぐとをこがましいとて誰かが此かる變名を用いたので無からうか」と敷衍してあり、やや人名と考えるに傾いたように見える。

²¹ 築島氏前掲解説、頁 581。

²² 不空の音寫方式と不空以前のそれとの簡便な比較には、李榮『切韻音系』（一九五六年、北京、科學出版社）の附録「圓明字輪譯文表」「根本字譯文表」を見よ。脱鼻音化という用語は用いないものの、不空の譯音を利用してこの現象を指摘し

空に由来する音寫方式を用いるからには、眞言宗の僧である可能性が高いと考えてよいであろう。

前半部は五十巻として構想されたばかりでなく、実際にも五十に分けられていたものであるらしい。高山寺本第三帖において、卷三十二と卷三十三との順序がそれぞれまとまりをもって入れ違っていることから、白藤禮幸氏は本来「それぞれ各巻でまとまった一卷（乃至一帖）の本の形態をなしていた」と考えた²³。また最近、木田章義氏は唐寫本「説文」との比較によって、木部の「梁」字に接續すべき百三十二字が脱け落ちていることを指摘し、「梁」字がちょうど卷四一の終わりに当たっていることから、もとは各巻が独立した形になっていたと推測している²⁴。ただ今の「萬象名義」前半五十巻をそれぞれ分けるとすれば、卷子にせよ冊子にせよ、あまりにも紙数が少なすぎて體を爲さない。空海撰述の部分が未完のままの稿本であったとすれば、未だ装本せず假とじのような形で各巻ごとに分けられてあったのであろう。とすれば上のような巻次の轉倒や紙の抜け落ちが生じることは理解しやすいから、何も出来上がった本を想定するには及ばないと思われる。

「篆隸萬象名義」が一名「篆隸字書」とも稱されるのはすでに見たところだが、寫本には「篆隸萬象名義」とあって、「篆隸字書」の名稱は全く用いられていないから、これは一種の俗稱と考えてよい。ともあれ篆隸の二字を冠してあるからには、この二書體が掲げられるべきであるが、実際には篆體は全書の約六パーセントの文字にしか記されていない。篆體の記入は各帖の初めの部分に集中する。中でも二、三、五帖の首ではそれぞれ前の帖から部首が續いているに關わらず、前の帖に篆體なく、これらの帖の首に篆體が記されていることから、もとはすべての文字に篆體があったものと、白藤禮幸氏は考えている²⁵。とすれば書手が煩を厭って全書への記入を怠ったということになる。「萬象名義」所收の一萬五千六百餘の文字すべてに篆體を與えようとすれば、「玉篇」には篆體を載せないのだから、その典據になった字書を別に考えねばなるまい。岡井慎吾氏はその典據を玄宗敕撰の「開元文字音義」に求めたが²⁶、神田喜一郎氏はその可能性は低いとして斥けられた²⁷。その理由は「開元文字音義」は上に隸體、下に篆體を掲げる體例で、これは「萬象名義」とは異なるというものであった。また篆隸二體を掲げる字書は他にもあり、李陽冰の「字統」がそれであるが、これも李陽冰の創始した篆文書體が玉箸體と言われるもので、「萬象名義」の懸針體とは相容れないから、「字統」に據ったものでもない。結局、神田氏によれば、もっとも可能性の高いのは、唐代に行われた「説文解字」である。事實、今日に傳わる唐抄本「説文」の篆體は「萬象名義」と同じ懸針體だ、というのである。筆者は神田氏の「説文」に據ったであろうとする説に同意するものである。「萬象名義」の篆體が書かれてある個所を見ていくと、ところどころ抜け落ちている文字があるが、その多くが「説文」未収録の文字だからである。例えば、第一帖の土部で抜けているのは坤、塾、坑²⁸、塤、の八字で、そのうち前の二字は「説文」に見えるものの、塾は新附字で「萬象名義」の依據した「説文」には無かった可能性があり、他はすべて「説文」に載せない文字である。玉部で抜けている瑋字、田部で抜けている字もやはり「説文」未收字である。すると「萬象名義」は説文に據って篆體を拾っていきながら、「説文」に見えない文字を跳ばして記入していったのであろうと思われる。しかし「萬象名義」の方が「説文」よりは収録字数が多く、實際「説文」未收の文字に對しても篆體を與えていることがあるが、その來源は

た Henri Maspero, Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang, BEFEO, tome XX, 1920 もなお必讀文獻であり、脱鼻音化についてはさらに水谷眞成氏の「唐代における中國語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋學報』第三十九卷第四號、昭和三十三年）を参照されたい。

²³ 白藤氏前掲「篆隸萬象名義解説」頁 640。

²⁴ 木田章義「顧野王『玉篇』とその周邊」、『中國語史の資料と方法』（京都大學人文科學研究所、1994）頁 106-107。

²⁵ 白藤氏前掲「篆隸萬象名義解説」頁 642-3。

²⁶ 岡井氏前掲論文、頁 86-87。

²⁷ 神田喜一郎「篆隸萬象名義解題」、『弘法大師全集』増補第六輯（昭和四十一年、密教文化研究所）

²⁸ 高山寺寫本のこの部分には実際には「坑」字はなく、その位置に「呼」が置かれて「呼決反深、空、」と書いてある。しかしこれは「坑」の反切上字が親字の位置に紛れ込んだものであって、正しくは「坑呼決反深、空、」でなければならず、それは反切および訓義から明かである。

相変わらずはっきりとはしない。或いは増字本の「説文」が存在してそれによったか、或いは偏旁ごとに寄せ集めて篆體を作ったかの何れかとしか考えられない。何れにせよ、全ての文字に篆體を出すことはかなり難しい作業であり、各帖ごとに始めてはみたものの結局途中で断念してしまっているのは、この困難が理由の一つになっていると思われる。

さて「萬象名義」が顧野王「玉篇」の抄録であることは繰り返し述べてきたことであるが、空海は果たして「玉篇」から音切と訓釋を抜粋するのみで、何ら己の意匠を盛り込まなかったのかということとは当初から問題となった。山田孝雄は、原本「玉篇」残巻と「萬象名義」とを較べて相異なる点を挙げ、そこに「撰者独自の見知」による取捨のあることを強調した²⁹。これは楊守敬や内藤湖南が「萬象名義」の価値がもっぱら原本「玉篇」の姿を窺い得るところにあるとしたのに対する反動であったとも言える³⁰。しかしながら、現存する原本「玉篇」残巻はそれぞれが異なった傳承を持つテキストであり、均質な性格を考えることは出来ず、単純にこれらの残巻との相異を以て、「萬象名義」の獨自性を主張することは出来ない。事實、各残巻と「萬象名義」の間には際立った親疏の違いが存在する。各残巻との比較を個別に行って、説得的な成果を得たのは貞刈伊徳氏である³¹。同氏によれば、まず残巻卷二十七と「萬象名義」を比較すると、その反切は全同であり、のみならず残巻に見える誤りを「萬象名義」がそのままに蹈襲しているものが可成り存在する。例えば、「紇音𪗇反」「纘子反」「經結反」などがそれで、第一の例は直音注であるから「反」は錯衍であり、後二例は宋本の反切「子卯切」「徒結切」から考えて、それぞれ反切上・下字が脱落していると思なされる。さらに宋本の反切との比較で明らかに誤りと分かるもの、例えば「祭苦體反」「莫體反」の反切下字「體」はともに「禮」の誤りであり、「纏居半反」「繪胡𪗇反」「女反」「胡反」の反切下字はそれぞれ「羊」「檜」「兗」「玦」の誤りであると推測される。また「繫」字の反切を「玉篇」残巻が「古絹反」、 「萬象名義」が「古反」とするの、宋本「玉篇」の「古詣切」を見れば、これも同種類のものである。要するに、こういった誤りまでを含めて、残巻「玉篇」卷二十七と「萬象名義」とは一致しているわけで、この事實によって、「萬象名義」所據本の「玉篇」が残巻二十七に極めて近い関係にある本であったことが分かる³²。卷二十七とは對照的に、「萬象名義」との不一致が大きいのは卷九、卷十八、卷十九である。一方、卷二十二は相異が非常に少ない。このように「玉篇」残巻の各巻は異なる系統の本であると考えられ、したがって「萬象名義」との比較で、今日の残巻と異なるからといって、それが直ちに「萬象名義」の獨自性に繋がるとは言えない。むしろ誤りまでも含めた卷二十七との近似を考えれば、「萬象名義」はその據った「玉篇」を忠實に寫していると思えるのが妥當である。

残巻各巻はそれぞれ異なる系統の本であるとする貞刈氏の基礎の上に、上田正氏は、さらに反切用字の分析を進め、残巻の新古についての層別を行った。上田氏は同音でありながら「萬象名義」と残巻「玉篇」で用字を異にする反切を取り上げ、それらの用字を切韻系韻書および宋本「玉篇」の反切と比較することで、卷十八・十九では残巻に比べ「萬象名義」の反切が古い特長を示し、卷九では反対に「萬象名義」のほうが古い特長を示すという結論を導き出した³³。これは「萬象名義」の前半が空海の、後半が別人の續撰であるとする前提に立てば、空海の據った「玉篇」は古く、續撰者の用いた「玉篇」はより新しいものであったということになる。

²⁹ 山田孝雄「篆隸萬象名義解題」、『崇文叢書』本「篆隸萬象名義」末巻（昭和三年、崇文院）。また『典籍説稿』（昭和九年、東京、西東書房）頁一三六～一四一に再録。

³⁰ 湖南の「萬象名義」に対する見解は「弘法大師の文藝」に見える。これはもと明治四十五年六月に高野山で行った講演。後『日本文化史研究』（大正十三年、京都、弘文堂）、また『全集』第九卷（昭和四十四年、東京、筑摩書房）に収録。

³¹ 貞刈伊徳「玉篇と篆隸萬象名義について」、『國語學』第三十一輯、昭和三十三年十二月、頁91-99。

³² 非常に近い関係にあるが、しかし現存残巻卷二十七そのものによったものではないことは、反切用字の違いが若干ながら存在することから推測される。上田正「玉篇残巻論考」『神戸女學院大學論集』17-1（1970）頁23を参照。

³³ 他の残巻、卷八は残存部僅少のため比較に堪えず、卷二十二、卷二十七はもともと異同がほとんど無いわけであるから、反切用字の違いも又ないわけである。

新古の層に關連して、上田氏は卷十八・十九のような古い姿のものと、卷九に代表される新しいものとの別は、中國本土に因由を求めるべきであるとして、後者の新しいものを蕭愷の改訂本と見なしたが、これは如何なものであろうか。顧野王之「玉篇」撰述は梁の大同二年(536)であり、蕭愷の改訂は太清二年(548)のことである。八・九世紀の中國で、一體この二つの本が截然と區別して行われていたであろうか。唐代の通行本は、蕭愷改訂本はおろか、すでに孫強増字本の系統であったとしてもおかしくはない。さらに反切は、比較的變改の加えられやすい部分である。敦煌本の「玉篇」は、注文は原本系の内容を持ちながら、音注部分は反切に替えるに直音を以てしている³⁴。反切に大幅な變改を加えた「玉篇」が唐代に行われていたことは充分に有り得る。上田氏の主張する相対的な古さについては賛成できるとしても、それを個別の蕭愷改訂本に結び付けるのはどうであろうか。蕭愷、孫強以外にも、歴史に名を残すことなく「玉篇」の改訂に当たった人物は一、二に止まるまい。

上田氏には又、第五帖に特徴的に見える竝母の反切上字「菩」について極めて興味深い発言がある。そもそも「菩」が反切上字に用いられることは、切韻系韻書、宋本「玉篇」また「玉篇」殘卷を通じて全く無い。殘卷、宋本、逸文と對照して見ると、この反切上字の使用されている個所は原本「玉篇」では「蒲」乃至「菰」であったと思われる。その「蒲」「菰」が、四個所殘すだけで、三十二條にわたって悉く「菩」に改められているのである。この事實を音韻面から説明することはできない³⁵。上田氏は「佛家的な方向でその心理を解くべきであろう」という。だとすれば、これは「萬象名義」が「玉篇」を抄し取る際に手を入れたことがはっきりと分かる例としては唯一のものであり、その意味で注目すべき事柄である。

三

高山寺寫本に關わる幾つかの問題點を、先學の研究成果に依據しながら概觀した。この寫本が唯一の傳本であるために、その成立に關わる困難な問題はなかなか全面的に解決することが難しい。それにも關わらず、我々はこの貴重な遺産に然るべき正しい位置を與え、有効に活用していく努力をせねばならない。前世紀の終わりに「萬象名義」が再發見された際、この書は失われた原本「玉篇」の姿を窺い知るための資料として高い評價を受けたのであった。以來、多少の紆餘曲折はあったが、結局矢張りこの評價に落ち着くものと思われる。ただ、この字書が日本人によって作られたものであり、わが國の字書史に實質的な存在を主張している以上、その意味で國語學者の熱心な研究對象となるのは當然である。特に近年、宮澤俊雅氏、池田證壽氏などが「圖書寮本名義抄」との關連を細かに追及しておられるのは目覺ましい事實の一である³⁶。また我が王朝時代において「玉篇」が果たした役割の大きさを考えると、「玉篇」抄録本たる「萬象名義」が國語國文學の重要な材料であることも否定しがたい。しかしまた翻って考えるに「萬象名義」が本來「玉篇」の節略本であり、それが本質であるとすれば、やはり「説文」から「字林」を経て「玉篇」へと受け繼がれ

³⁴拙文「玉篇の敦煌本」「同・補遺」、京都大學教養部『人文』第三十三集(一九八七)、第三十五集(一九八九)を参照されたい。

³⁵白藤禮幸氏は、「萬象名義」の反切系聯では、「菩」と「蒲」とは同聲とまでは結び付けられなかった、という。「聲母字より見たる「篆隸萬象名義」の内部差」『島田勇雄先生退官記念ことばの論文集』(昭和五十年、大阪、同刊行會)頁83。しかし、これは反切に用いられた「菩」字を、「萬象名義」艸部に收められた草名「菩防誘反」と同音と見なして處理したための誤りである。これならば奉母だが、「菩薩」「菩提」の「菩」は竝母字でなければならないのは言うまでもない(「廣韻」薄胡切)。

³⁶宮澤俊雅「圖書寮本類聚名義抄に見える篆隸萬象名義について」『訓點語と訓點資料』第五十二輯(1973)、同「圖書寮本類聚名義抄と篆隸萬象名義」『訓點語と訓點資料』第七十七輯(1987)。池田證壽「圖書寮本類聚名義抄と篆隸萬象名義との關係について」『人文科學論集』第二十七號(信州大學人文學部、1993)、同「圖書寮本類聚名義抄の單字字書的性格」『國語國文研究』第九十四號(北海道大學、1993)。

た中國の部首分類體字書の發展史のなかで、もっと利用の方法が摸索されてよい。「萬象名義」には宋本「玉篇」やまた今本「説文」の誤りを正すことの出来る點が頗る多いのである。同じ弘法大師空海の「文鏡秘府論」が、中國古逸の文學理論の書物を數多く引用することで高い評價を受け、中國にも多くの研究者が居ることを考えると、「萬象名義」のほうも今少し注目され研究されてもよいのではないか。過去に周祖謨氏の優れた研究があるだけに、現在の中國側の研究状況は若干寂しい思いがする。「萬象名義」の獨特の價値はまた、その中國音韻史の資料ともなる點である。顧野王「玉篇」の反切は當然ながら、南朝に行われた音を代表するものであり、「切韻」音系との比較は、中國音韻史の重要な課題となる。その際に「萬象名義」の反切は原本「玉篇」の反切の代わりとして使用し得るのである。この點に着目した研究は、すでに日中兩國で行われている。すなわち、戦前、奇しくもほぼ同時期に、周祖謨、河野六郎兩氏によって爲された仕事がそれである³⁷。兩氏の研究は、互いに補い合う點を備えつつ、ともに極めて高い評價を得ている。ただ前節で見たように、「萬象名義」の據った「玉篇」及びその反切が、空海撰述部と續撰部とで異なるものであるとすれば、その觀點からの見直しが必要であるかも知れない。

しかし、どのような利用が爲されるにせよ、この寫本は、楊守敬が早くに「此の書を鈔せし者、草率の極みにして、奪誤滿紙なれば、此は則ち小學に深き者の理董を待つ有らざる能わず」と指摘したように、「玉篇」から引用するに際しての誤字、脱字がすこぶる多く、このことが資料としての「萬象名義」の弱點になっている。有効な利用の前提としては、「玉篇」殘卷や逸文の存するものは當然これらを利用し、また「説文」を初めとする中國字書に助けを求めながら、これらの誤謬を正す嚴密な校定の作業が必要であろう。

³⁷周祖謨氏の「萬象名義中之原本玉篇音系」はもと北京大學において羅常培の指導下に書かれた卒業論文(1936年)。日中戦争中、羅常培によって保存され、解放後、周氏の論文集『問學集』上册に初めて發表された。また河野六郎氏の「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」も、もと東京大學の昭和十二年度の卒業論文、のち『河野六郎著作集』二「中國音韻學論文集」、1979年、平凡社)に收められた。